



島根県 インドネシア
美郷町 バリ島マス村

友好協定締結 30周年記念誌

30th Anniversary of Friendship Agreement

友好協定締結30周年記念誌

30th Anniversary of Friendship Agreement

2024年3月 発行
発行 美郷町
企画・編集 山陰中央新報社

美郷町とバリ島マス村の交流の経緯

1979年、美郷町(旧邑智町)が国民体育大会のカヌー競技開催地に決定したことがきっかけで、1980年、町内にあった邑智高等学校にカヌー部が誕生しました。カヌー部は1982年の国民体育大会で好成績を収め、以降カヌー競技が盛んになっていきます。

当時、町としてもカヌーをテーマにした町づくりを進めていくことを決定し、その先駆けとして1991年に町内にカヌー博物館を開設しました。そのオープニングイベントとして、「世界のカヌー展示」と「インドネシアのカヌー(ジュクン)の製作実演」を行ったことが、マス村との交流のきっかけです。その後、1993年9月に旧邑智町長はじめ7名がマス村を訪れ、友好協定の調印を行いました。

1994年には、邑智町国際友好協会が発足し、お互いの住民が国を行き来する民間交流が活発化し、交流の歴史は2023年で30周年を迎えました。

インドネシアの都市と友好姉妹都市協定を結んでいる日本の自治体は全国でも8自治体のみで、その中でもバリ島の自治体と友好協定を締結しているのは美郷町だけです。

バリ島マス村ってどんなところ？

インドネシア共和国バリ州ギャニール県ウブド郡の南に位置する人口約13,000人の村です。古くから木彫り工芸を営む村として有名で、多くの住民が木彫り産業に従事しており、黒檀やチークをつかった木彫り芸術の村として知られます。また、絵画も有名で、非常に繊細で写実的な絵画が特徴です。マス村は16世紀にジャワ島の高僧が移り住んだという土地柄もあり、バリの歴史的にも重要な村とされています。農業は水稻が主で、水路が整備されている平野では年間3回の水稻が収穫されます。

バリ島は「トリ(3つ)・ヒタ(安全・繁栄・幸せ)・カラナ(理由)」という哲学が根付いており、これは「自然と神と人の3つが共存してこそ人々は幸せになれる」とした、自然と宗教を大事にする考え方です。また、バリ島は8月から9月頃に「ガルンガン」という先祖の霊が家族の元に帰ってくるためのお祭り(日本で言うお盆のような行事)を行います。こういった文化や伝統・人とのつながりを大事にするといった共通点があることも、美郷町とバリ島マス村の交流が長く続いた理由かもしれません。



マス村の田園地帯。田植えをする人々が見える



マス村の街並み

CONTENTS

美郷町町長、マス村村長あいさつ..... 3	マス村の訪問団が美郷町を訪れる
協定書 5	マス村の訪問団が美郷町に到着 21
HISTORY バリ島マス村とこれまで..... 7	美郷町内で行われたケチャナイト 22
バリ島マス村に思いを寄せて 関係者の思い 9	美郷町での30周年記念式典 23
美郷町の訪問団がマス村を訪れる	バリとみさとと。まつり 25
マス村で開かれた30周年記念式典..... 18	地域のイベントでもバリ文化に触れる 27
美郷町の中高生がバリ島を散策! 19	美郷町内の「マス村」を紹介..... 28
	美郷町の将来へ向けた取り組み 29
	嘉戸隆町長インタビュー 30



美郷町 町長 嘉戸 隆

美郷町(締結当時は旧邑智町)は1993年9月10日にインドネシアバリ島マス村と友好協定を締結して、2023年で30周年を迎えました。

これまで、長い間草の根の交流を続け、多くの町民や子供たちがお互いの町・村を行き来し、友情を育んできました。また、町としても友好協定5周年、10周年などの節目には、公式行事としてマス村を訪問し、友好の継続についてお互いに確認してきました。

そして、これまで続けてきたこの交流は、近年急速に深化しています。2021年にはバリ島の伝統音楽であるガムラン音楽の団体「ミサト・サリ」が町内に発足し、石見神楽とガムラン音楽を融合した創作神楽を、2023年10月の「バリとみさとと。まつり」で初披露し、大きな反響を呼んでいます。また2022年からは、バリ島の技能実習生5名が美郷町に来町し、農業・福祉分野で一生懸命働いておられるなど、マス村との友好から始まった取り組みが、30年の年月をかけて文化交流・経済交流にまで発展しています。

日本の自治体で、海外の自治体と友好協定を結び、30年も交流を続けているのは、非常に珍しいケースであり、また、バリ島の自治体との友好協定は美郷町とマス村の1組だけとなります。我々美郷町民にとって、マス村との交流は長年の時を経て、かけがえのないものとなっており、今後も世代を超えて末永く友情を育んでいきたいと思っています。

本誌は、これまでのマス村との交流や、町民の方の思い、今後の展望などを記載した30周年記念誌として発刊させていただきました。是非ご一読いただきますよう、お願い致します。



マス村 村長 イ・ワヤン・グデ・ダルマユダ

Om Swastyastu オム・スワスティアストゥ。

(バリでの最初のご挨拶、「神様から恵みと平安がありますように。」という意味です)

はじめに、唯一神へ感謝の言葉を捧げます。私、バリ島マス村の村長、イ・ワヤン・グデ・ダルマユダはマス村の住民を代表して、マス村と美郷町の出会いに対し誇りと喜びを感じていることを申し上げます。この素晴らしい出会いのおかげで、マス村はあらゆる分野、特にゴミの効率的な処理の仕方などを含める公衆衛生の分野において発展を遂げました。美郷町(旧：邑智町)からいただいたご協力の一つは1998年にゴミの輸送と管理をするために、ゴミ回収トラックを提供、寄贈していただいたことです。

マス村と邑智町(現美郷町)との友好関係は1993年に始まりました。それ以来、美郷町から訪問団が度々来ていただきました。私たちの村の高校生も何人か美郷町にホームステイさせていただきました。一昨年(2022年)美郷町が私たちの村の住民を技能実習生として受け入れてくださいました。また、2023年は友好協定30周年を記念して、私はマス村からの訪問団を連れて、美郷町を訪れました。このマス村と美郷町の友好関係は神様からいただいた良い縁だと思います。私達はこの友好関係が長く続いていることを嬉しく思います。

早いものでこの友好関係はあっという間に30年を迎えました。その間に健康、教育、文化、様々な分野においてたくさんのご協力をいただきました。これからもマス村と美郷町の絆を深め、さらなる互いの発展と繁栄を目指していくことができると思います。マス村の村長としてこの友好関係が続いてきたことを嬉しく思います。

最後に、マス村を代表して、この友好関係と協力関係がこれからも続いていくことを心から願っております。マス村と美郷町がさらなる発展を遂げ、世界的に有名になるまで、共に考えましょう。

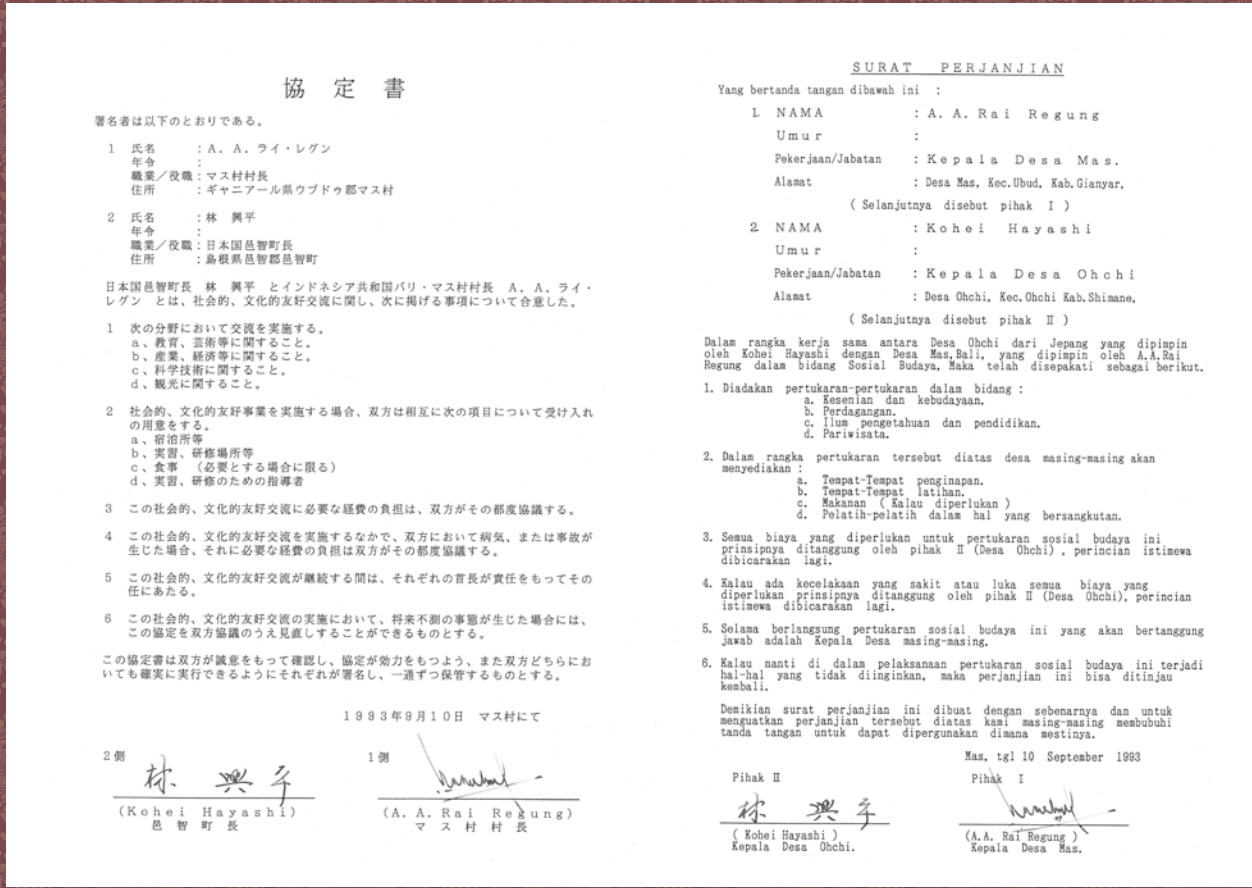
MAS – MISATO-CHO MASYARAKAT AMAN SEJAHTERA

マス村&美郷町2つの町と村が平和で豊かになりますように

Om Shanti, Shanti, Shanti Om

オム・シャンティ、シャンティ、シャンティ・オム

(バリでの最後のご挨拶、「心に、全世界にいつまでも平和でありますように。」という意味です)



1993年9月10日、マス村で行われた友好協定締結式での協定書。ここから美郷町とマス村の交流が始まる。

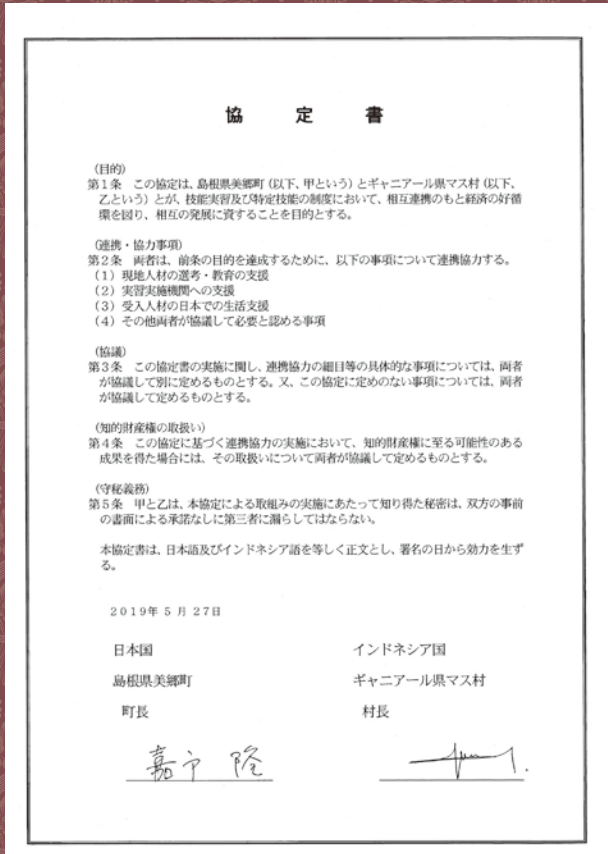
協定書

1993年9月10日に、当時の邑智町長である林興平町長と、当時のマス村の村長であるライ・レグン村長とで友好協定書に署名を行い、友好の歴史がスタート。その後、2019年1月23日には美郷町とマス村として友好協定書を更新。

2019年5月27日には、技能実習制度に関する協定書を締結し、美郷町での技能実習生受け入れに関して、両者で連携協力していくことを確認した。



2019年1月23日、マス村で行われた友好協定25周年記念式典で、邑智町から美郷町に更新した際の協定書



2019年5月27日、マス村ダルムユダ村長が美郷町に来町した際の、技能実習及び特定技能実習制度に関する連携協定締結時の協定書



HISTORY バリ島マス村とこれまで



1991年5月15日付山陰中央新報

くにびき国体を機に、カヌーが盛んに

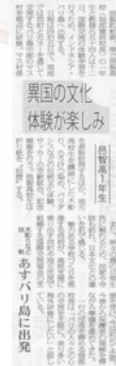
1979年国体のカヌー会場になったのを機に1980年邑智高校にカヌー部が誕生。1982年の国体で好成績を取め、以降カヌーが盛んに。



1991年5月19日付山陰中央新報

カヌー博物館開館 ジュクンの製作実演

カヌー博物館の開館に合わせてバリ島マス村から職人が来町し、インドネシアのカヌー「ジュクン」を製作。これをきっかけにマス村との交流が始まる。



1997年11月11日付山陰中央新報

修学旅行でバリ島へ

旧邑智高校生徒が修学旅行でバリ島マス村へ。合計300名以上が現地の高校生と交流（～2004年）。



2001年9月2日付山陰中央新報

マス村高校生受け入れ

毎年マス村の高校生が3ヶ月間、町内でホームステイ。邑智高校へ通学（～2005年）。



みさとサンバル完成

バリ島からのIターン者が美郷町の素材を使ったバリ島の家庭調味料サンバルを商品化。地元食材を利用した「みさとサンバル」販売開始。



友好協定20周年 友好訪問団を派遣

マス村に友好訪問し記念セレモニーを開催。美郷町からマス村へ文房具などの記念品を贈呈。

「友好協定30周年記念事業」

友好協定30周年を記念し、年間を通して事業を実施。記念式典を8月にマス村で、10月には美郷町でそれぞれ挙行了。



1993年9月18日付山陰中央新報

友好協定締結

旧邑智町長をはじめ7名がマス村を訪問し、友好協定調印式に参加。



1996年8月20日付山陰中央新報

技術研修生受け入れ

マス村から2名の技術研修生を1年間受け入れ。家電製品の修理技術や日本料理の研修を行う。



1997年11月19日付山陰中央新報

トラック購入資金寄付

ごみ収集用トラック購入資金協力要請を受け、邑智町国際友好協会が募集。集まった150万円をマス村に寄付した。



友好協定合意書

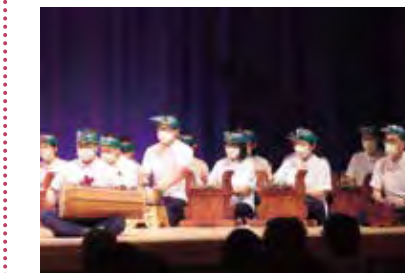
美郷町として協定更新

1993年に旧邑智町として調印した友好協定を25周年を節目に美郷町に更新。



技能実習生受け入れ協定書

2019年5月には技能実習及び特定技能実習制度に関する連携協定を締結。



ミサト・サリ結成

町内外の有志で構成するガムラン楽団・舞踊団「ミサト・サリ」が結成され、活動を開始。



技能実習生受け入れ

バリ島から5人の技能実習生を受け入れ。農業と介護分野に従事し3年間で技能習得を目指す。（後段中央は国際交流員）

バリ島マス村に思いを寄せて 関係者の思い

カヌーがつないだ縁誇り

1 》協定署名当時の町長 林 興平さん

1993年9月10日、インドネシア・バリ島マス村の集会所で村と島根県邑智町(現美郷町)の友好協定調印式がありました。「お互いの幸せにつながる関係を築きたい」。協定書に署名した当時の町長、林興平さん(80)はそう話しました。町から約5200キロ離れた南の島の村と、親密な付き合いが始まった瞬間でした。

邑智町を流れる中国地方最大の河川・江の川は、氾濫すれば恐ろしい牙をむきますが、普段は川幅も広く穏やか。カヌーに適し82年のくにびき国体で競技会場となりました。林さんは79年から7期町長を務め、豊かな水を生かしカヌーの里づくりを進めました。

そのカヌーが町とマス村をつなぎました。町は1991年、ふるさと創生事業で江の川河畔に世界のカヌーを展示するカヌー博物館を開館。記念イベントで招かれたバリ島の職人2人が島の伝統的なカヌー「ジュクン」の製作を実演しました。その職人の1人がマス村の村長の甥で、橋渡しをしてもらい協定締結に至りました。

林さんが93年に初めてバリ島を訪れ、印象に残ったのが各地で盛んな芸術活動でした。「木彫りや絵画、織物、銀細工などそれぞれの村が特色ある民芸、工芸に取り組む。邑智町民がこの文化に触れたら刺激を受けるだろう」と期待しました。

協定締結翌年の94年に町国際友好協会が発足し、交流が本格化。これまで町民200人以上がマス村を訪れ、地元の県立邑智高校(現島根中央高校)も生徒300人以上が修学旅行で異文化に触れました。

林さんは公的、私的を含め10回近く足を運んだといいます。「小さな町が世界とつながり30年も交流が続いたことは感慨深い。誇りに感じ、続けてほしい」と願っています。
(2023年4月22日付 山陰中央新報)



マス村で手に入れた特産の木彫りの鳥を眺めながら、交流を振り返る林さん

絆途切れぬように 支えたい

2 》実習生に農業教える 烏田 正輝さん

季節外れの汗ばむような陽気となった4月の島根県美郷町。「メーターをよく見て、進む速度を調節してください」。山あいの白ネギ畑で一般社団法人ファームサポート美郷(美郷町久保)の理事、烏田正輝さん(65)が、インドネシア・バリ島からの技能実習生に、インドネシア語を交えながら農業機械の扱い方を教えていました。

美郷町とバリ島マス村は30年前に友好協定を結び2019年、技能実習生の受け入れ協定締結に発展しました。22年、若者5人が来町し、ファームサポート美郷などで農業や介護を学んでいます。

烏田さんはこれまで実に約50回、バリ島に足を運び、住民と触れ合ってきました。島の文化や美しさに魅せられた一人です。

きっかけは町職員時代。1991年に町が整備した美郷町亀村のカヌー博物館を担当したため、開館前後の5年間関わりました。同年の開館記念イベントでバリ島から職人を招き、島の伝統的なカヌー「ジュクン」の製作を実演してもらいましたが、この企画案が浮上したころはまだ、ジュクンを見たことはなく、存在を疑った状態だったといいます。

91年にバリ島を初訪問して、初めてジュクンを目にしました。船首に顔や目が描かれ、海岸にずらりと並ぶ光景は壮観でした。「南の島の情緒にあふれる素晴らしい場所だ」と気に入りました。

友好協定締結後、地元の邑智高校の生徒が修学旅行で訪れたり、村の高校生を短期留学で受け入れたり、交流は活発でした。しかし、邑智高の閉校などで各種事業が打ち切られ一時、下火になった時期もありました。

烏田さんは「途切れさせてはいけない」と、短期留学経験者のビデオレターをバリ島で撮影。留学生のホームステイ先だった町民を集め、上映会を開いて喜んでもらいました。

今は技能実習生の男性2人の農業研修を担当。「泥だらけの作業をいわず、よく働いてくれる」と喜びます。インターネットや交流サイト(SNS)の普及で人と人がつながりやすくなりました。「気楽にコミュニケーションを取れる関係になってほしい。交流が続くよう陰ながら支えたい」と話しています。

(2023年5月23日付 山陰中央新報)

企画したコンサートと、
烏田さんを紹介した当時の新聞記事
(ともに2007年8月掲載の山陰中央新報)



バリ島からの技能実習生(左)に農業を教える烏田さん



全国唯一の友好協定 誇り

3 》交流を打診した元邑智町職員 田邊 積さん

島根県美郷町とインドネシア・バリ島マス村が友好協定を結んだ翌年の1994年、町国際友好協会が設立されました。行政から町民主体の交流に移す目的で訪問団の派遣や経済支援、技能実習生のサポートなどを続けてきました。現在、3代目会長の田邊積さん(73)は「日本で最もバリに近い町が美郷」。バリは世界的に人気の島で、島内の自治体と友好協定を結ぶのが全国唯一なのも誇らしいといいます。

元町職員。旧邑智町企画推進室係長で締結前の93年2月、交流の可能性を探るためマス村を初訪問しました。当時のライ・レグン村長に打診すると快諾されました。締結後、町内の各種団体の代表者らに参加を呼びかけ会員約60人で協会が発足。事務局長に就き95、96年と訪問団を現地派遣しました。

交流は広がり97年には地元・邑智高校のマス村への修学旅行が始まりました。田邊さんも同行したり、現地との調整を手伝ったりしました。

これまで公私合わせて20回程度、バリを訪れました。大家族で暮らし、地域でたびたび開かれる祭りに総出で協力する現地の人々の姿が印象に残ります。古き良き日本にあった家族愛や地域コミュニティが残り「学ぶことが多い」と感じました。

バリ島は主要産業が観光業のため、新型コロナウイルス禍による移動制限は特に大打撃となったといいます。窮状を知り、町国際友好協会として支援しようと活動。町民から集めた寄付金計111万円をマス村へ贈りました。村からは、お礼と友好の証として美郷町の公式マスコットキャラクター・みさ坊の木彫りが届きました。木彫りは村の特産品です。

町を退職後に会長を務め、13年目を迎えました。町内にはインドネシアの伝統芸能ガムランの楽団が設立され、バリからの移住者もいます。今後の交流の新展開に期待し、その際もやはり「バリに一番近い町」が最大のアピールポイントになると力を込めます。

(2023年5月27日付 山陰中央新報)



バリ島で入手したタペストリーを手に交流を振り返る田邊さん

孫との連絡 毎晩の楽しみ

4 》娘2人がインドネシアに嫁いだ 山本 幹雄さん

「これがバリにいる5歳の孫だ」。島根県美郷町高畑の山本幹雄さん(74)＝美郷町議＝は、スマホ画面に映し出した男の子の写真を見せながらほほえみました。バリ島のあるインドネシアに娘2人が嫁ぎ、孫6人が暮らしています。

元来旅行好きで中国や韓国、ベトナム、シンガポールなどアジア各国を訪れました。旧邑智町職員だった

1993年、町がバリ島のマス村と友好協定を締結したのを機にバリへ頻繁に行くようになり、これまで約30回、足を運びました。

インドネシアには時間を伸びるゴムに例える「ゴムの時間」という言葉があります。日本人からすれば大ざっぱにみえるインドネシア人の時間感覚を表したものです。日本と異なるゆったりとした時の流れに「せわしなさを忘れてのんびりできる。心が穏やかになる」と魅了されました。年を通じて暑い気候や食も気に入ったといいます。

バリとの縁は2人の娘に広がりました。長女・綾子さん(40)は地元の邑智高校(現島根中央高校)を卒業後、バリに留学。山本さんが「バリの大学に行くのも面白そうだぞ」と勧めると、家族旅行で訪れた際に島の雰囲気気に入っていた綾子さんは、すぐに留学を決めたといいます。

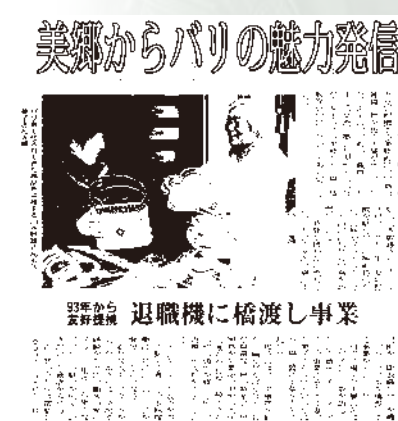
次女の総子さん(37)も姉の後を追ってバリへ。姉妹は現地でインドネシア人と結婚し現在、綾子さん家族はバリ、総子さん家族はスマトラ島で暮らしています。

5歳から高校3年までの孫との連絡手段はLINEのチャットや電話。山本さんは「しょっちゅうこれを買ってと写真付きでねだってくる」と苦笑しつつ、毎晩のやりとりを何よりの楽しみにしています。

マス村との友好協定締結30周年を迎え、一時下火になった交流機運が再燃しているのを感じています。

インドネシアは人口2億7千万人の市場と豊富な天然資源で経済成長を続け、世界的な観光地バリとの交流は美郷町の活性化につながる可能性を秘めます。山本さんは町に来る技能実習生の増加や、バリへ留学する若者による人的交流の活

発化を望み「そうすると、さらに町が元気になりそうだ」と期待しています。
(2023年6月10日付 山陰中央新報)



山本さんが町内でバリ雑貨店を開いた当時の記事(ともに2006年の山陰中央新報)



バリ島で暮らす孫の写真を示せる山本さん



美郷をガムランの町に

5 》町バリ文化振興アドバイザー 梅田 英春さん

インドネシア・バリ島マス村と友好協定を締結して今年が30年となる島根県美郷町には現在、バリの伝統音楽ガムランで使用する楽器が3セットあります。3セットも持つ自治体は全国的にも珍しく、町バリ文化振興アドバイザーを務める梅田英春・静岡文化芸術大学教授(61)は「日本中から愛好者が集うガムランの町になってほしい」と願っています。

ガムランは青銅製打楽器を中心とする合奏形態の総称。鉄琴に似たガンサや鍋を逆さにしたような形のレヨン、大きなドラのゴングなどで編成します。バリ島、ジャワ島など地域ごとに組み合わせが異なり、小編成から大編成までさまざまです。結婚式や葬式、祭りで欠かさず演奏されインドネシア人の暮らしに深く根付いています。

梅田教授は民族音楽学を専門とするほかガムラン奏者、バリの影絵人形芝居・ワヤンの人形遣いの顔も持ちます。国立音楽大(東京都)の1年時、授業でガムランと出合って興味を抱き春休みにバリを訪れました。ガムランは楽譜がなく口伝えで教わっています。現地の人たちが楽しみながらみんなで音楽を作り上げる姿に、それまでの音楽観が一変。「楽譜に縛られなくていい。音楽はもっと自由に楽しむものだ」と痛感しました。

ガムランの一流の研究者になるために、まずは一流の奏者になろうと考えました。バリの芸術大に2年間、留学し腕を磨きました。国内初のバリのスタイルによるガムラングループ「スカル・ジュブン」の創設に加わり、代表を長く務めました。

バリ文化への深い造詣を買われ2021年に、美郷町のアドバイザーに就任しました。その際に私物のガムラン1セットを町に寄託。町民らが21年に立ち上げた日本最大規模のガムラン楽団ミサト・サリの指導などで毎月1、2回、町を訪れています。

町が23年度、通年で展開する30周年記念事業の目玉の一つが、石見神楽とガムランを融合させた新演目の上演。ミサト・サリと町内の神楽団が共演し、石見神楽の「八岐大蛇(やまたのおろち)」をアレンジした創作演目を10月の祭りで披露します。プロデュースを担う梅田教授は「バリの文化をしっかりと理解して取り入れ、美郷町ならではの形でアレンジして発信する。それがバリへの敬意であり、交流の恩返しになる」と熱く語ります。(2023年6月24日付山陰中央新報)



ガムランの楽器を鳴らす
梅田英春・静岡文化芸術大学教授

舞踊から文化の架け橋に

6 》ガムラン楽団を指導する 嵐谷 洋子さん

デ、ボン。デ、ボン。6月中旬、島根県美郷町長藤の大和中学校体育館の一室にインドネシアのバリ舞踊独特の掛け声が響きます。声の主はバリ舞踊家の嵐谷洋子さん。美郷町民らでつくるバリ伝統音楽ガムランの楽団「ミサト・サリ」の舞踊メンバーに演目「マルガパティ」を教えています。「美郷とバリの文化の懸け橋になりたい」と熱がこもります。

島根県奥出雲町出身・在住。バリ舞踊を始めたのは1996年、大阪市内で会社員だった頃でした。社内で習い事がブームになり、情報誌で見つけた大阪府豊中市内のバリ舞踊教室に通い始めました。最初は基本動作もままありませんでしたが「先生のアドバイスを少しずつ近づいていくのがうれしかった」と夢中になりました。

毎日、出社前と帰宅後、自宅で踊りのビデオを繰り返し見ながら、自主練習する熱の入れようでした。

舞踊家を志し会社を辞めて3年間、バリの国立芸術大デンパサール校の舞踊科に留学。連日、早朝から夕方までレッスンや講義に明け暮れました。現地で友人の日本人女性とコンテストに出場し入賞もしました。日本人出場者は唯一で、新聞に大きく取り上げられたといいます。「練習してきたことは間違ってたなかった」と自信に



美郷町ガムラン楽団で
バリ舞踊を指導する嵐谷洋子さん

なりました。

帰国後、郷里でバリ舞踊教室を開講。現在、山陰中央新報文化センター出雲教室で講師を務めています。

美郷町とは不思議な縁でつながりました。留学中にバリで知り合い、交流サイト(SNS)でつながる日本人女性が、バリから美郷町に移住。会いに行くと、ミサト・サリを担当する町職員を紹介され、舞踊を教えることになりました。

今、指導するマルガパティは女性が踊る男性舞踊の演目。美郷町とマス村の友好協定締結30周年記念事業の一環で、10月に町内で開かれる祭りで初めて披露します。協力しながらバリ文化で盛り上がる美郷町民の姿に、バリの人々から感じた助け合いの心を思い出すといい。「町を挙げてバリとの交流に取り組む自治体はほかにはない。町からバリ文化を発信するお手伝いをしたい」と話しています。

(2023年7月8日付 山陰中央新報)

人つなげる神秘的な音色

7 》ガムラン楽団長 西原 慎治さん

島根県美郷町粕渕のみさと館では毎月、町が30年来交流するインドネシア・バリ島の伝統音楽ガムランの神秘的な音色が響きます。2年前に町民らで立ち上げたガムラン楽団ミサト・サリの練習です。団長を務める西原慎治さん(51)は「さまざまな世代、職種の人たちがガムランを目的に集い、つながる。ガムランには人を引きつける力がある」と魅力を語ります。

浄土真宗の明光寺(島根県美郷町小松地)の17代目住職。民族音楽が好きで、もともとはアフリカ民族音楽の愛好者グループで、西アフリカの伝統的な太鼓ジェンベをたたいていました。

町バリ文化振興アドバイザーで、静岡文化芸術大の梅田英春教授からガムランの楽器セットが町に寄託され、2021年7月に演奏体験会が開かれたのを契機に、町内に楽団結成の話が持ち上がりました。演奏したかった西原さんは創設メンバーに加わり、2カ月後の楽団発足時に団長となりました。

ガムランは青銅製打楽器を中心とする合奏形態の総称。鉄琴に似たガンサや鍋を逆さにしたような形のレヨンなど、独特な形状の楽器で編成します。楽団には楽器奏者32人とバリ舞踊を踊る8人の計40人が所属し、規模は日本最大とされます。4歳児から90代の高齢者まで年齢の幅は広いです。

楽団は21年11月の町産業祭での初公演以来、精力的に公演を重ねています。特に今年は町とバリ島マス村が友好協定を締結して30周年の節目とあり、地元のイベントや祭りに引っ張りだこです。10月に町内である30周年記念事業の祭りでは地元の神楽団と共演し、石見神楽の「八岐大蛇(やまたのおろち)」をアレンジした創作演目も披露します。

「30年の交流の歴史が下地にあるからこそ、ガムランが町に広まり、受け入れられた」と実感しています。

将来の交流の担い手となる町の子どもたちへのワークショップにも注力。小中学校に出かけ児童、生徒に簡単な演奏を体験してもらいます。「楽しく楽器に触れ、音を出してもらいながら、ガムランやバリ島を身近に感じてほしい」と話しています。

(2023年7月22日付 山陰中央新報)



ガムランの練習に励む西原慎治さん

母国の食文化発信 注力

8 》インドネシア人の国際交流員 アネタ・ウィジャヤンティさん

インドネシア・バリ島マス村と30年来の交流を続ける島根県美郷町に2021年12月、初めてインドネシア人の国際交流員が着任しました。アネタ・ウィジャヤンティさん(32)。日本語で「美郷町とインドネシアをつなぎたい」と流ちょうに語り、町に暮らすインドネシア人技能実習生の生活支援、母国の食文化の情報発信に努めています。

ジャワ島東部のマラン市出身。人口約90万人の都市でリンゴが特産品といます。小学5年生の時に授業で国際連合の存在を知り「かっこいい。いつか国際関係の仕事をしたい」と憧れました。

坂本九さんや五輪真弓さんの歌が好きな父や、アニメ「ドラえもん」「NARUTOーナルトー」をよく見ていた兄の影響で日本語に興味を持ち、地元の大学の日本語学科に進学。在学中に1年間、同志社大(京都市)に留学しました。

日本で暮らしたいと思っていたところ、大学の先輩から日本で国際交流員を募集している話を聞いて応募。試験に合格して美郷町に赴任しました。

町での業務の一つが技能実習生のサポートです。町とマス村は19年5月、技能実習生受け入れの協定を締結しました。22年にバリ島から実習生5人が来町し農業や介護を学んでいます。インドネシアではごみを分別する習慣がなく、分別方法が書かれた日本語の冊子をインドネシア語に翻訳し、実習生に説明しました。日本語を教えたり、町で手に入らないインドネシアの香辛料をインターネットで注文したりして、親身になって生活を支えています。

料理を作るのも食べるのも好きで、日本では母国の料理があまり知られていないことを残念がっています。「インドネシア料理と聞いて、名前が出るのが焼きめしのナシゴレン、焼きそばのミーゴレンばかり。悲しいですね」

それだけに今、力を入れているのがインドネシア料理の情報発信です。町内の公民館や団体が開く料理教室で講師を務め、豚の串焼き「サテバビ」や焼き魚「イカンパカル」、辛味調味料「サンバルマタ」の作り方などを教えました。「もっとおいしいものがたくさんあると知ってほしい」。食を通じて母国の魅力を伝えたいと考えています。(2023年8月5日付 山陰中央新報)



島根県美郷町で初めてとなる
インドネシア人国際交流員のアネタさん

実子同様の存在に感慨

9 》女子留学生を家庭に受け入れ 三上正明さん・美紀子さん夫妻

島根県美郷町都賀西の三上正明さん(70)方の玄関に色紙が1枚飾られています。18年前、ホームステイで受け入れたインドネシア・バリ島の女子留学生アユ・クリスナさん＝当時(15)＝が残した絵です。南の海を泳ぐ魚やイルカが描かれた色紙を見つめ、正明さんと妻・美紀子さん(65)は「アユと過ごした3カ月は忘れられない」と振り返ります。

1993年に美郷町とインドネシア・バリ島マス村が結んだ友好協定は、国境を越えた高校同士の交流へ発展

しました。2001年、町内の邑智高校(現島根中央高校)がバリのウブド国立第一高校と姉妹縁組を締結。同年から05年まで、バリの高校生計10人が邑智高に3カ月間留学し、ホームステイしながら通学しました。

三上さん宅には05年、最後の留学生となったアユさんが滞在。同年代の娘がいることなどを理由に町職員に頼まれ、当初は「年頃の女の子を3カ月も受け入れるのは無理」と断りましたが、最終的に受け入れました。

自宅の一室を用意し迎えました。家族11人に交じり食卓を囲む中、アユさんは次第に日本の食事にも慣れていきました。バリから持参した、インドネシアの食卓に欠かせない辛味調味料サンバルをつけて食べるようになりました。

長女、次女と一緒に今はないJR三江線で通学し車内で言葉を教え合いました。陸上競技大会に出場する三女の応援で一緒に県外へ出かけたり、アイススケートを体験したりしながら楽しく過ごしたといいます。夫妻はアユさんに気を使わせないよう自分の子どもと同様に接することを心がけ「オトサン(お父さん)、オカサン(お母さん)」と慕われました。

ホームステイ最後の日はアユさんと抱き合い見送りました。「アユがいる生活が普通になっていたのだから何か一つ欠けるような寂しさがあった」と美紀子さん。正明さんも「自分の娘のように思っていたので、あまり言葉が出なかった」と振り返ります。

アユさんは今、バリで医師として活躍しています。夫妻はバリのテレビ番組があれば画面に映らないかと探すといいます。「元気をもらった。受け入れて良かった」。町から約5200キロ離れた異国の高校生と過ごした日々は、かけがえのない思い出として胸に刻まれています。(2023年8月19日付 山陰中央新報)



アユ・クリスナさんが残した色紙を見ながら
思い出を振り返る三上さん夫妻



アユさんが三江線で通学していたことを伝える
当時の新聞記事
(2005年9月30日付山陰中央新報)

町民の支えに日々感謝

10 》農業を学ぶ技能実習生 アグスさん、ジュニアルタさん

真夏日となった8月上旬の島根県美郷町。一般社団法人ファームサポート美郷の施設内で、白菜の苗を移し替える作業に汗を流すインドネシア人技能実習生がいました。法人で農業を学ぶバリ島出身のイ・ブトゥ・アグス・マンディタさん(26)とイ・ニョマン・ジュニアルタさん(21)。2人は「美郷町は優しい人が多い。暮らしは楽しい」と口をそろえます。

30年の交流がある美郷町とバリ島マス村は2019年、技能実習生の受け入れに関する協定を締結しました。実際の受け入れは20年からの予定でしたが、新型コロナウイルス禍で延期に。22年にアグスさんとジュニアルタさんのほか、女性3人の計5人が来町しました。

アグスさんはマス村、ジュニアルタさんはバリ島東部ブグブグ村出身。2人は来日前、レストランやホテルで働き、農業は未経験でした。それでもジュニアルタさんは「外国で働くのが夢だった」と期待に胸を膨らませて来日しました。町内の畑で白ネギやタマネギ、ソバなどの栽培に携わり、法人職員に「気長に優しく教わっている」とほほ笑みます。

2人が町民からの支援で特に感謝するのが、冬服の寄付でした。寒さをしのげるよう、約50枚をもらったといいます。「いろいろな服をたくさんもらって助かった」と感謝します。

赤道付近からやって来たのに悩まされているのが、日本の夏の蒸し暑さです。8月のバリは乾季で湿度は少なく、最高気温が30度を超えることはありません。アグスさんは「日本の夏の方が暑い。大変だ」と苦笑いします。

2人は21年に町民らで発足したバリ島伝統音楽ガムランの楽団ミサト・サリに入り、メンバーと演奏を楽しんでいます。地元の子どもにサテバビ(豚の串焼き)やミーゴレン(焼きそば)、サンバルマタ(辛味調味料)などバリ料理を教えたこともあります。バリ文化を大切にする町民の姿がうれしく「もっと伝えたい」と話しています。

(2023年9月2日付 山陰中央新報)



町民の支えに感謝しながら農業を学ぶアグスさん(左)とジュニアルタさん

辛味調味料を新名物に

11 《マス村から3年前に移住 田中利典さん、紗江さん夫妻

インドネシア・バリ島マス村と30年来の交流を続ける島根県美郷町に2022年、新名物ができました。町産食材を使ったインドネシア料理に欠かせない辛味調味料サンバルで、名は「みさとサンバル」。3年前、マス村から美郷町に家族6人で移住した田中利典さん(44)と、妻・紗江さん(43)が作りました。夫妻は交流が生み出した商品で町の盛り上げに一役買っています。

利典さんは横浜市、紗江さんは大阪市出身。夫妻はバリ島で約20年暮らし、獅子の姿をしたバリ島の聖獣バロンの顔をかたどったクッキーを開発。人気の土産品となりました。

今後の生活を考え帰国することにインターネットで移住先を調べると、マス村と交流する美郷町に目が留まりました。利典さんの両親が安来市出身なのも島根県に縁を感じさせたといいます。

2カ月後の2019年11月に美郷町を初訪問し雄大な江の川に魅了され、20年1月の再訪時には子どもが町の雰囲気「バリと色が似ている」と語ったのが決め手に。それから同町都賀本郷で暮らし地域おこし協力隊として活動しています。

サンバルはインドネシアの食卓に必ずある身近な調味料で、味は各家庭で異なります。みさとサンバルの商品化は田中家のサンバルを食べた町職員から、ふるさと納税の返礼品にしてはどうかと勧められたのがきっかけ。町内産の唐辛子やニンニク、ピーマン、レモングラスに加え、薬草のトウキやノビルも入れました。薬草栽培に力を入れる美郷町らしさを取り入れたといいます。

22年2月にインターネットで300個を発売するとわずか8分で完売する人気ぶり。辛さ2倍以上の「鬼辛」も追加し、特産品販売「ぢげもん」(松江市北堀町)、出雲物産館(出雲市大社町修理免)など、町外にも販路を広げました。バリ島でヒットさせたバロンクッキーのように土産品としての売り込みも考えています。

二人三脚のサンバル作りに地元住民が食材提供で協力し、夫妻は「感謝しても感謝しきれない」と語ります。「みさとサンバルが売れてみんなが潤い、生産意欲が高まる。そんな好循環をつくりたい」と理想を描いています。

(2023年9月16日付 山陰中央新報)



地元食材でサンバルを商品化した田中利典さん(左)、紗江さん

マス村で開かれた30周年記念式典

友好30周年交流発展誓う／美郷町×バリ島・マス村



友好協定締結30周年記念式典で握手を交わし、交流発展を誓い合う嘉戸隆町長とダルマユダ村長

2023年8月18日、インドネシアバリ島マス村で美郷町とマス村の友好協定30周年記念式典が開催され、美郷町からの訪問団39名とマス村村民が今後のさらなる交流を誓い合いました。

訪問団は町内の中高生17人と、嘉戸町長、原議長のほか町議会、町商工会、町観光協会、町民らの22人、合計39人で構成。訪問団が村に入るなり、大勢の村民の熱烈な歓迎を受けながら村の集会所で式典が始まりました。式典ではマス村のダルマユダ村長は「交流には楽しい思い出がいっぱいある。これからも仲良くしていきたい」とあいさつし、嘉戸町長も交流の歴史を振り返りながら「今後も、世代を超えて末永く友情を育んでいきたい。」と語りました。また、美郷町国際友好協会からマス村の子ども達へと寄付金を贈呈しました。

中高生はバリ舞踊の演目「ルジャン・マス」を現地の踊り手と舞い異文化体験しました。町のバリ伝統芸能ガムランの楽団ミサト・サリの舞踊メンバーで、大和中学校3年の難波紗奈さん(15)は「現地の人は指の先まで動きが滑らかで、隣で踊っていて勉強になった」と本場の踊り手のすごさを肌で感じていました。

大和中学校3年、田中南鶴さん(15)が、美郷町の名所を記した自作の観光マップをインドネシア語で紹介しました。町職員は石見神楽の演目「恵比寿」を舞い、盛り上げました。

式典後、中高生は地元の中高生から、バリのお供え物「チャナン」の作り方を教わり楽しく交流しました。

記念式典の様子



大和中学校3年生の田中南鶴さん(右)による、美郷町の観光マップの紹介



美郷町国際友好協会からマス村へ寄付金の贈呈



町役場職員による石見神楽の披露



美郷町の中高生とマス村婦人会によるバリ舞踊「ルジャン・マス」の披露

サラスワティ寺院は「水の寺院」と言われる美しいお寺です。伝統的な衣装に着替え、バリ島ならではの建物の造りを見学しました。また、ウブド市場では「値切る」ことが当たり前で、子ども達は日本ではなかなか経験できない価格交渉に必死でした。

美郷町の中高生が バリ島を散策！

友好訪問団としてインドネシア・バリ島を訪れた美郷町の中高生が2023年8月19日、島内の史跡や名所を散策しました。3班に分かれ、事前学習で考えたルートに沿って散策。ハスの池に囲まれたサラスワティ寺院や古代の石窟遺跡ゴアガジャを訪れ、現地の歴史や文化への理解を深めました。

バリ島 訪問前



事前学習で散策ルートを考える中高生



結団式で意気込む中高生ら



ウブド市場＋サラスワティ寺院



パロンクッキー工場



今ではバリのお土産の定番ともいえるパロンクッキーの工場で見学しました。パロンクッキーは、マス村から美郷町にIターンした方が運営しています。



ゴアガジャ



「像の洞窟」という意味の洞窟で、洞窟内にある石像と瞑想スペースを見学しました。



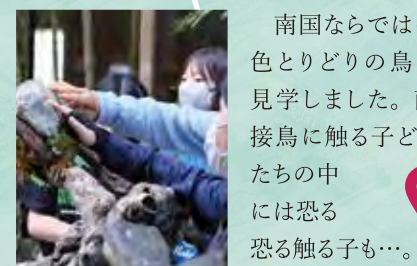
バリサファリ

バリにある人気のサファリパーク。車に乗って野生動物の見学をしたり、エレファントライドやウォーターライダーなども体験しました。



トゥグヌンガンの滝

落差20mの滝で、大迫力の滝つぼ近くまで行き、マイナスイオンを満喫しました。



南国ならではの色とりどりの鳥を見学しました。直接鳥に触る子どもたちの中には恐る恐る触る子も…。

バリバードパーク

マス村の訪問団が美郷町に到着

友好30年／12人、町民と絆強める



邑智小学校児童に拍手を送るマス村からの訪問団＝島根県美郷町粕淵、みさと館

美郷町に2023年10月12日、友好協定を結ぶインドネシア・バリ島マス村からの訪問団12名が到着しました。一行は17日まで滞在し、協定締結30周年を記念した式典やイベントに出席して町民と絆を強めました。（来町は4年半ぶり）

訪問団はダルマユダ村長や、バリ島の伝統音楽ガムランや伝統舞踊バロンダンスの演者ら12人。粕淵のみさと館でセレモニーがあり、地元の邑智小学校5、6年生の鼓笛隊46人が息の合った演奏を披露し、インドネシア語で「ようこそ」と歓迎しました。

ダルマユダ村長は「温かい歓迎をしていただきありがとうございます」とあいさつ。嘉戸町長が「町の文化や自然、食を楽しんでほしい」と呼びかけました。



バスで美郷町に到着したバリ島マス村からの訪問団を迎える嘉戸町長ら



訪問団を案内する嘉戸町長（左）



息の合った演奏で訪問団を迎えた邑智小学校の児童

美郷町内で行われたケチャナイト

バリ舞踊ケチャ楽しむ／訪問団と町民心一つに



ケチャを楽しむ参加者＝島根県美郷町長藤、道の駅グリーンロード大和



参加者とケチャを楽しむマス村からの訪問団

美郷町長藤の道の駅グリーンロード大和で2023年10月13日夜、バリ伝統舞踊ケチャのイベント「神在月のケチャナイト」が開催されました。このイベントは、マス村からの訪問団来町に合わせて、都賀長藤地域の住民グループ「本郷BASE」が企画したもので、当日はマス村の訪問団や町民のほか、町外からのバリファンら100人以上が集まりました。

イベントでは、地元の楽打ちがオープニングを飾り、よさこいグループ「太陽花（しゅうてんか）」による迫力のダンス、マス村に15年住んでいた日本人ミュージシャン Michiro-U（ミチローユー）とバリ舞踊を独自のダンスに昇華させたダンサー Chizuko のユニット「Kitsune no yomeiri」による幻想的なパフォーマンスが披露されました。

イベントの最後には、会場の参加者全員でバリの伝統芸能「ケチャ」で行う独特の掛け声を合わせ、会場がひとつになりました。



よさこいを披露する太陽花



伝統の楽打ちを披露する地元住民たち



イベントの様子

美郷町での30周年記念式典

交流深化へ／協定締結30年の節目祝う

2023年10月14日、美郷町で友好協定30周年記念式典を開催し、マス村の訪問団や美郷町民(議会、町内関係者、中高生など)約100人が節目を祝うとともに、今後の交流の深化を誓いました。

嘉戸町長からは、民間同士の交流に始まり、邑智高校の修学旅行でのマス村訪問や、近年ではバリ島からの技能実習生の受け入れ、町民によるバリの伝統音楽ガムラン楽団の結成といった動きに触れ、「これらの取り組みはマス村との交流があったからこそで、改めてマス村との長い友好の歴史の尊さを実感した」とあいさつしました。また、マス村のダルマユダ村長は「この30年間、教育、経済、文化の分野で支えていただき感謝している。友好関係を継続したい」と述べられ、お互



集合写真

いに記念品を交換しました。美郷町からは、石見神楽の衣装の技法を用いてインドネシアの国章「ガルダ」を形取ったものを贈呈し、マス村からは、芸術の村らしくマス村の画家による「みさ坊とフクロウ(バリ島では縁起の良い鳥とされている)」の絵画を贈呈いただきました。



挨拶する嘉戸町長



挨拶するダルマユダ村長

記念式典の様子



ダルマユダ村長に記念品を贈る嘉戸町長(左)＝石見神楽の衣装の技術で作ったインドネシアの国章ガルダ



嘉戸町長に記念品を贈るダルマユダ村長(右)＝マス村の画家による「みさ坊」とバリで幸運の鳥とされている「ふくろう」



町民やマス村からの訪問団が参加して行われた記念式典



挨拶する美郷町議会の原議長



挨拶する在大阪インドネシア共和国総領事館のアンディー・ラクスマナ領事

バリとみさとと。まつり

石見神楽とバリ音楽共演／美郷町友好30年

バリとみさとと。まつり



2023年10月15日、美郷町とマス村の友好協定30周年記念事業のメインイベントとして、役場庁舎周辺を会場に「バリとみさとと。まつり」が開催されました。イベントでは、町内のガムラン楽団「ミサト・サリ」の演奏に始まり、マス村の訪問団による本格的なバリダンス(獅子舞のような踊り)が披露され、会場を魅了しました。また、バリ島伝統の影絵であるワヤンクリッを現代的にアレンジした「ワヤン・リストリック」や、2023年8月にバリ島に訪問した中高生の体験発表、バリ島との交流を考えるフォーラムなどが行われ、会場外のバリ料理ブースへの来客も併せて町内外から1,000人を超える来場がありました。

午後からは会場を邑智小学校体育館に移し、ガムランと石見神楽のコラボレーションによる創作神楽「八岐大蛇」が初披露されると、美郷町では珍しい8体の大蛇に会場は大盛況でした。創作神楽「八岐大蛇」は、静岡文化芸術大学の梅田英春教授を中心としたミサト・サリと、町内の神楽団6社中で構成する美郷町神楽連絡協議会が2023年7月から練習を重ねて完成させた演目で、バリ舞踊の衣装と仮面を着け、奇稲田姫(クシナダヒメ)に扮した女性が登場し、須佐之男命(スサノオノミコト)が大蛇と戦う際の刀を振り下ろすのに合わせて、シンバル状のガムラン楽器チェンチェンを鳴らすなど、随所に工夫が凝らされています。



石見神楽の創作演目を披露する神楽団とミサト・サリのメンバー＝島根県美郷町粕淵、邑智小学校体育館



バリ舞踊



バリ雑貨が並ぶマーケット

イベントの様子



オープニングでバリ伝統音楽ガムランとバリ舞踊を披露したミサト・サリ



マス村を訪れた中高生が発表したバリ島との交流を考えるフォーラム



バリ舞踊の衣装と仮面を着け、奇稲田姫(クシナダヒメ)に扮した女性(中央)と須佐之男命(右)

地域のイベントでもバリ文化に触れる

美郷町×マス村友好協定30周年記念事業の一環として、2023年度はたくさんの地域でバリ島の要素を取り入れたイベントが開催されました。「ミサト・サリ」による演奏や舞踊の公演、ガムラン楽器の演奏体験、バリ料理教室、バリ島の食のブース出展など、内容は地域によって様々で、初めてバリ文化に触れる方も多く、たくさんの方が異文化を楽しみながら体験していました。

美郷町内イベント一覧(R5年度)

No	主催団体	イベント名	実施日	場 所	参加人数
1	潮・曲利連合自治会	潮さくらまつり	R5. 4. 1	潮公民館	250
2	君谷地域連合自治会	君谷マーケット	R5. 4.15	君谷交流センター	180
3	シャクナゲパーク花ノ谷保存会	第11回花の谷しゃくなげ祭り	R5. 4.23	シャクナゲパーク花の谷	160
4	吾郷地域連合自治会	吾郷ここから祭り	R5. 5.21	吾郷公民館	350
5	別府連合自治会	別府ほたる祭り	R5. 6.10	安らぎの里駐車場	500
6	美郷町商工会	第15回 美郷町花火大会	R5. 7.22	尻無川河口	1,500
7	都賀行ふれあいサロン	バリ♡大和子供のための料理教室	R5. 8. 4	都賀行公民館	42
8	比之宮連合自治会	蟠龍峡サマーキャンプ 「バリ料理を体験し暑さに打ち勝とう」	R5. 8.5～7	蟠龍峡公園	58
9	フレンド比之宮	サマーフェスティバルin蟠龍峡 「バリ舞踊と触れあおう」	R5. 8.13	蟠龍峡公園	200
10	酒栄会	酒谷盆踊り	R5. 8.13	森原古道駐車場	72
11	グリーンロード納涼祭実行委員会	2023グリーンロード納涼祭	R5. 8.13	長藤屋内ゲートボール場	380
12	比之宮連合自治会	比之宮・笹目地区盆踊り大会	R5. 8.14	比之宮旧ゲートボール場	180
13	粕浏同志会	粕浏盆踊り大会	R5. 8.14	粕浏五又路	200
14	美郷町地域おこし協力隊実行委員会	夏ASOBI特別企画 アユを堪能する川遊び	R5. 8.20	道の駅グリーンロード大和	200
15	粕浏連合自治会	粕浏寺小路歴史ロマン夜市	R5. 9.16	町道寺小路線沿線	380
16	本郷BASE	神在月のケチャnight	R5.10.13	グリーンロード大和	300
17	沢谷連合自治会	沢谷元気祭り	R5.11. 6	沢谷交流センター	300
18	美郷町(実行委員会)	第19回美郷町産業祭みさとふるさとまつり	R5.11.12	邑智小学校校庭	1,000
19	美郷町(実行委員会)	第38回鴨山簗籠かき大会	R5.11.12	邑智小学校校庭	1,000
20	美郷町社会福祉協議会	美郷町歳末チャリティーショー	R5.12. 3	みさと館	200



蟠龍峡サマーキャンプ



みさと夏祭り



君谷マーケット



別府ほたる祭り



潮さくらまつり



沢谷しゃくなげまつり

美郷町内の「マス村」を紹介

江の川河畔のカヌー博物館(亀村)には、バリ伝統のカヌー「ジュクン」が展示されています。旧邑智町が1991年に博物館を開設した際、マス村の職人を招いて製作を実演。その縁で交流が始まったのでジュクンは象徴といえる存在です。安全祈願で船首に魚の顔をかたどっています。

美郷町役場には、役場庁舎の新築記念としてマス村から寄贈された絵画や木彫りが飾られています。絵画には、シャクナゲや鮎、カワセミなど美郷町に因んだものが描かれており、木彫りは石見神楽の「八岐大蛇」がモチーフになっており、非常に細かな細工が施されています。

町役場から東へ約200メートル離れた粕浏トンネルの入り口にも注目してください。壁面にバリ舞踊レゴンダンスの踊り手や魔よけの神ボマが彫られたレリーフがあります。2001年にバリ島の石彫り職人が来町し製作したものです。

町はこれから信喜橋近くの江の川左岸(同町信喜)に、ジュクンをイメージした外観のカヌー艇庫を建設します。

2025年の全国高校総体(インターハイ)や30年の国民スポーツ大会のカヌー競技で使用される予定です。

ぜひ注目してみてください。



カヌー艇庫イメージ図



マス村との交流の原点とされるジュクン＝美郷町亀村、カヌー博物館



役場庁舎の新築記念としてマス村から寄贈された絵画と木彫り＝美郷町粕浏、町役場



バリ島マス村の職人が製作したレゴンダンスの踊り手(右)と、魔よけの神ボマのレリーフ(左)＝島根県美郷町粕浏、粕浏トンネル

美郷町の将来へ向けた取り組み

美郷町は、マス村との長い交流の歴史の中で、住民がお互いの国を行き来し、多くの民間交流を行ってきました。

近年では、文化交流や経済交流にまで発展しており、全国でも珍しい美郷町ならではの取り組みに繋がっています。

■ガムラン楽団「ミサト・サリ」の発足

美郷町とマス村の長年の交流に共感いただいた、静岡文化芸術大学の梅田英春教授から、インドネシアの民族楽器であるガムラン楽器一式が寄託されたことがきっかけで、美郷町にガムラン演奏・舞踊を行う楽団「ミサト・サリ」が発足しました。メンバーは町民のみならず、町外在住者も加入しており、様々な地域イベントで演奏や舞踊を披露しています。



■技能実習生の来町

美郷町の人手不足解消とバリ島の技能向上を目的に、2019年に美郷町とマス村で「技能実習生の受け入れに関する協定」を締結しました。バリ島に限定して技能実習生を受け入れることにより、文化も理解しており、言語もインドネシア語だけで良いことから、お互いに対応が容易であることがメリットです。

2022年に5名の技能実習生が来町し、それぞれ農業分野や福祉分野に従事しています。



■ビジネスプランコンテスト

2021年からビジネスプランコンテストを開催し、企業からの優秀な提案に対して、実現するための補助金を交付しています。2021年には、バリ島の事業に特化した企業から提案があり、補助金の交付を決定しています。この企業は、美郷町で作られたインドネシアの調味料「ミサトサンバル」をYouTubeやECサイトで販売したり、美郷町のイベントでのブース出店や、バリ島で活躍する画家の招致などを行っています。



嘉戸隆町長インタビュー

美郷町とマス村が友好協定を結んで30周年を記念した事業が終わりました。

嘉戸隆町長に事業の振り返りと今後の展望について聞きました。

バリの町条例制定へ 取り組み深化目指す

Q1.30周年事業の手応えや振り返りをお願いします。

A1. 想定していた以上の盛り上がりでした。町内で開いたイベントには町内外からたくさんの方に来ていただき、若い人から30年の歴史を知っている人まで楽しんでいただきました。マス村への訪問には中高生17人を連れて行くことができました。バリとみさと。まつりではガムランと石見神楽の共演を行い、神楽を初めて見るバリ島ファンの方にも非常に興味深く見ていただけたと思います。



美郷町長 嘉戸 隆

Q2. マス村への訪問団に中高生を加えた経緯を教えてください。

A2. マス村との友好関係を将来へつなげていくために、次の世代にも積極的に参加してもらいたいという思いがありました。また、これからの時代はより一層国際感覚が求められ、一般的な旅行ではなく地元と草の根で触れ合えるのは貴重な体験になると思いました。参加した子どもたちはみんな積極的に行動していたのでよかったです。バリ島の市場では子どもたちが値切っている姿がたくましく、印象に残りました。いろんな意味で視野が広がり、成長につながったのではないかと考えています。

Q3. マス村との交流が30年続いてきたことをどのように考えておられますか。

A3. 草の根で続いてきたことが大きかったと思います。行政のトップダウンではなく、町国際友好協会を中心に頑張ってこられました。ガムラン楽団「ミサト・サリ」の結成も行政が関わって設立したわけではないですね。地域の皆さんが草の根でつながってきたおかげで30年を迎えられました。

そして、小さな町同士で共感する部分が多かった点も大きいと思います。美郷町もマス村も文化と伝統を大事にする町で、人と人の結びつきを大切にしています。価値観が同じだからそここまでやってこられました。

Q4.30年を終えて、今後はどのような取り組みを考えておられますか。

A4. 新年度からは、より一層具体化させたいと考えています。一つ目はバリの町条例の制定と、バリの町宣言を行うことです。今までは単発の取り組みでしたが、美郷町として目指すバリの町とはどのようなものかを体系的にまとめます。バリの町づくりを進めることは美郷町の良さを発展させ、潜在人口や活動人口を増やすことにもつながると考えています。美郷町の町づくりの根幹に据えていきます。

二つ目は、「ガムランフェスティバル」を開催します。将来的には全国のガムランファンが美郷町に来たくなるような踊り手や楽団を招致し、バリの町を象徴する定期イベントとして毎年行いたいと考えています。

三つ目は、子どもたちのマス村訪問について毎年の定期行事として予算化したいと思っています。昨年8月に行いましたが、町議会でも好意的な意見が多く出ていました。中学3年生を対象に希望者を募り、今後はホームステイを受け入れてもらうことなども検討します。

マス村との友好交流を進めることはもちろん、町民の皆さんの幸福度を高める町づくりの取り組みに深化させていきます。

バリの町条例(前文)

私たちの美郷町は、神楽や地域行事などの伝統芸能、山くじらや鮎といった食など「地域に根差した文化を楽しむ豊かな町」であり、そうした暮らしを通して培われてきた「人と人との結びつきを大切にする町」です。

そして、神楽に代表されるように、頑なに伝統を守るのではなく、柔軟に新たな創造を加えて地域文化を進化させてきました。

このような特質的な風土により美郷町らしい町の活気が生み出されてきました。

1993年(平成5年)に友好姉妹都市提携を結んだバリ島マス村も、ガムランや舞踊、祭、工芸品などの地域文化と地域住民の連帯を大切にする、美郷町と相通じる価値観を持つ村です。

これまで、美郷町とマス村は、草の根の交流を続け、お互いの文化を理解し、親しみ、友好の絆を深めてきました。

そして、マス村を含むバリ島の伝統文化芸術は、西洋芸術との融合をはじめ、伝統を大切にしながらも、常に創造され、洗練され、世界中の人々を惹きつけてきました。美郷町と親和性の高い気風を持つバリ島の文化を積極的に楽しみ、また、バリ島の文化を愛好する多様な人々と結びつきの輪を広げ強化する取り組み、すなわち「バリの町」づくりを進めていくことは、美郷町の良さをさらに引き出し、新たな活気を生み出していくことにつながります。